

高齢者虐待に対する民生委員の認識とソーシャル・キャピタル

桂 晶子¹⁾

キーワード：民生委員、高齢者虐待、ソーシャル・キャピタル

要 旨

本研究は、高齢者虐待に対する民生委員の認識とソーシャル・キャピタルを把握すること、また、両者の関連性について示唆を得ることを目的に、A町の民生委員を対象に質問調査を実施し、以下の結果を得た。自分の住む地域において高齢者虐待を身近な問題であると感じる民生委員は29.5%であった。ソーシャル・キャピタルを6項目の質問により把握した結果A町全体の傾向としてソーシャル・キャピタルが豊かであることが推察された。また、高齢者虐待を身近な問題と捉える民生委員の認識とソーシャル・キャピタル合計得点との間に有意な負の相関が認められ ($r=-0.406, p<0.01$)、ソーシャル・キャピタルを高めることが高齢者虐待予防の一助となる可能性が示唆された。

Minsei-iin's Perception of Elderly Abuse and Social Capital

Shoko Katsura¹⁾

Key words : Minsei-iin, elderly abuse, social capital

Abstract :

The purpose of this study is to investigate and understand the relationship between the perception of elderly abuse by the district welfare commissioner, or "Minsei-iin" in Japanese, and social capital, in order to obtain discussion. A *Minsei-iin* questionnaire survey was conducted in Town A.

The following results were obtained: 29.5% of the respondents of this survey have seen and heard of elderly abuse and think that elderly abuse is an ongoing problem. The results of the questionnaire indicate that Town A has strong social capital. There is a significant negative correlation between the level of *Minsei-iin's* perception of elderly abuse and the total score for Social Capital ($r = -0.406, p < 0.01$). This result suggests that the enhancement of social capital can be a potential help in the prevention of elderly abuse.

1) 宮城大学看護学部 (Miyagi University School of Nursing)

I. はじめに

近年、わが国においては、少子高齢化、核家族化、情報化等の進展に伴い、人間関係や地域における人々の間つなぐりの希薄化が指摘されている。また、高齢者に対する虐待や高齢者を対象とした悪徳商法など、高齢者の人権の侵害が大きな社会問題として表面化してきた。こうしたなか、地域の住民同士のつながりの必要性と重要性がこれまで以上に強く指摘されるようになった。

地域の住民同士のつながりや協力に関する用語として、ソーシャル・キャピタルという概念が近年着目されている。ソーシャル・キャピタルは、「信頼」、「規範」、「ネットワーク」といった社会組織の特徴であり、いわば、信頼に裏打ちされた社会的なつながり、あるいは豊かな人間関係と捉えることができる¹⁻³⁾。この言葉は、アメリカの政治学者ロバート・パットナムが、著書「孤独なボーリング (1995)」において、アメリカではソーシャル・キャピタルが減退していることを指摘し、コミュニティの崩壊と再生について警鐘をならした⁴⁾。これが大きなきっかけとなり、ソーシャル・キャピタルという概念が世界的に注目されるようになった。

最近の研究において、ソーシャル・キャピタルの高い地域では、住民の健康感が高いことや^{5,6)}、ソーシャル・キャピタルが高齢者のメンタルヘルスに好ましい影響を及ぼすことなどが報告されている⁷⁾。また、自殺予防の観点からソーシャル・キャピタルの検討がなされている^{8,9)}。このように、健康を規定する社会的な因子の一つとしてソーシャル・キャピタルが公衆衛生学分野のなかで関心を集めている¹⁰⁾。しかしながら、わが国で、ソーシャル・キャピタルの研究がなされるようになったのは1990年代後半以降であり、高齢者虐待とソーシャル・キャピタルの関連について探求した研究は管見の限り認められない。

そこで本研究は、高齢者虐待に対する認識とソーシャル・キャピタルを把握すること、また、両者の関連性について示唆を得ることを目的とする。

II. 研究方法

1. 対象

A町の民生委員を対象に質問紙調査を実施し

た。調査は無記名自己記入式質問紙を用い平成22年3～4月に実施した。その結果、44人（回収率95.7%）より回答を得、これを分析対象とした。

2. 調査内容

1) 対象者の属性

性別、年齢、民生委員を担っている担当地域を把握した。なお、担当地域についてはA町の行政区域、宅地開発、歴史的背景などから7地域別に把握し、これを「新興住宅地」と「旧地区」に分けた。

2) ソーシャル・キャピタル

藤澤らの作成したソーシャル・キャピタル指標の6項目を適用した⁶⁾。具体的項目は、①私の住んでいるこの地区は安全である（以下、地区安全）、②私の近所の誰かが助けを必要としたときに、近所の人たちは手を差し伸べることをいとわない（以下、助け）、③私の近所には誰かが家を留守にしたときに、その家のことを気軽に世話をしてくれる雰囲気がある（以下、留守世話）、④急病の時など、すぐにかかれる医療機関があって安心できる地域である（以下、医療機関）、⑤私の地域では、お互いに気楽に挨拶を交し合う（以下、挨拶）、⑥将来も今住んでいる地域に住み続けたい（以下、住み続け）、である。

回答は「そう思う」～、「そう思わない」の5件法とし、肯定的な回答になるほど数値が大きくなるよう1点から5点を与えた（得点範囲6～30点）。

3) 高齢者虐待に関する知識と認識

(1) 高齢者虐待に関する知識として、「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」（以下、高齢者虐待防止法）が施行されていることについて、「知っている」、「知らない」の2件法にて回答を求めた。

(2) 高齢者虐待に対する認識として、「あなたのお住まいの地域において、高齢者虐待は身近な問題であると感じますか」との設問により、「そう思う」～「そう思わない」の5件法にて回答を求め、「そう思う」が高値となるよう1点から5点を与えた。

3. 倫理的配慮

調査の計画段階において、社会福祉法人A町社会福祉協議会およびA町保健福祉課の職員へ研究目的、調査方法、調査内容、倫理的配慮等について説明を行い、調査の承諾および許可を得た。その後、A町の民生委員の定例会の際に、社会福祉協議会の職員を通して質問紙を配布した。

対象者への倫理的配慮に関する説明内容として、研究目的、調査方法、プライバシー保護の確約、記入済みアンケートの保管と処分方法、調査協力は自由意志によるもので断っても不利益を被らないことの説明を文書を用いて行った。

なお、質問紙作成の際は、質問紙の記入に伴う対象者の負担を考慮し、プレテストを実施した上で、回答時間が長くとも15分以内となる質問量に留め（質問紙はA4用紙3枚、「年齢」以外の質問は全て択一項目）、かつ、文字の大きさを12ポイントとした。

4. 分 析

各変数について基礎統計量を求めた。また、ソーシャル・キャピタルと高齢者虐待に対する意識との関連を検討するため、Spearmanの相関係数を求めた。有意水準は両側検定でp値が0.05未満を統計的に有意とみなした。

Ⅲ. 結 果

1. 回答者の属性

回答者の属性は表1に示す通りである。性別は男性19人(43.2%)、女性25人(56.8%)の計44名

であった。年齢は60歳代が最も多く21人(47.7%)であり、次いで多かったのは70歳代の12人(27.3%)であった。表中には示していないが、民生委員を担っている担当地域は、「新興住宅地」が5人(11.3%)、「旧地区」が38人(86.4%)であった。

表1 対象者の属性 n=44

		人	(%)
性 別	男 性	19	(43.2)
	女 性	25	(56.8)
年 齢	40-49歳	1	(2.3)
	50-59歳	9	(20.5)
	60-69歳	21	(47.7)
	70-79歳	12	(27.3)
	無回答	1	(2.3)

2. ソーシャル・キャピタル

ソーシャル・キャピタル指標の回答は表2に示す通りである。6項目のうち「助け」においては、「そう思う」あるいは「どちらかというと思う」（以下、「思う」とする）と回答した人は95.4%であり、「そう思わない」あるいは「どちらかというと思わない」（以下、「思わない」とする）に回答した人はいなかった。また、「挨拶」、「住み続け」、「地区安全」の3項目については何れも「思う」と回答した人が8割を超え、「思わない」と回答した人は1割以下であった。

「医療機関」は、77.2%の人が「思う」と回答し、11.4%の人は「思わない」と回答した。「留守世話」については、52.3%の人が「思う」と回答し、「どちらとも言えない」が43.2%と最も多く、「思わない」は4.6%であった。

表2 ソーシャルキャピタルの回答分布 n=44

	そう思う	どちらかという そう思う	どちらとも いえない	どちらかという そう思わない	そう思わない
「助け」 私の近所の誰かが助けを必要としたときに近所の人たちは手を差し伸べることをいとわない	25 (56.8)	17 (38.6)	2 (4.6)	0 (0.0)	0 (0.0)
「挨拶」 私の地域では、お互いに気楽に挨拶を交し合う	24 (54.5)	15 (34.1)	4 (9.1)	0 (0.0)	1 (2.3)
「住み続け」 将来も今住んでいる地域に住み続けたいと思う	28 (63.6)	9 (20.5)	4 (9.1)	2 (4.6)	1 (2.3)
「地区安全」 私の住んでいるこの地区はとても安全である	18 (40.9)	18 (40.9)	7 (15.9)	1 (2.3)	0 (0.0)
「医療機関」 急病の時など、すぐにかかれる医療機関があって安できる地域である	17 (38.6)	17 (38.6)	5 (11.3)	3 (6.8)	2 (4.6)
「留守世話」 私の近所には誰かが家を留守にしたときにその家のことを気軽に世話をしてくれる雰囲気がある	9 (20.5)	14 (31.8)	19 (43.2)	0 (0.0)	2 (4.6)

表中の数字は人 (%)

3. 高齢者虐待に関する知識と認識

「高齢者虐待防止法」の認知については図1に示す通り、「知っている」と回答した人は36人(81.8%)、一方、「知らない」と回答した人は7人(15.9%)であった。

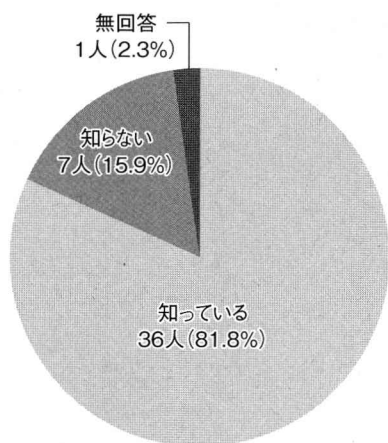


図1 「高齢者虐待法」の認知の有無 n=44

高齢者虐待に対する認識は図2に示す通りである。「高齢者虐待は身近な問題であると感じるか」について、「思う」と回答した人は29.5%であり、「どちらともいえない」は9人(20.5%)、「思わない」は50.0%であった。

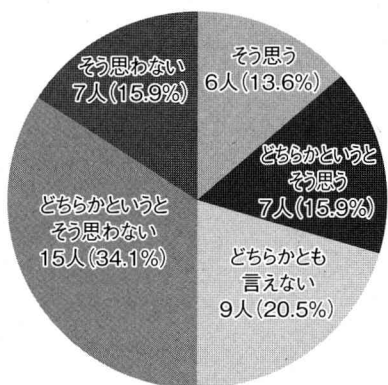


図2 居住地域において高齢者虐待は身近な問題と感じるか n=44

4. 高齢者虐待に関する認識とソーシャル・キャピタルとの関連

表3に高齢者虐待に対する認識とソーシャル・

キャピタルとの相関係数を示した。「高齢者虐待は身近な問題であると感じるか」の回答と、ソーシャル・キャピタル6項目の合計得点との間に有意な負の相関が認められた ($p < 0.01$)。

表3 高齢者虐待に対する意識とソーシャルキャピタルとの相関係数

高齢者虐待に対する意識	ソーシャルキャピタル	
あなたのお住まいの地域において、高齢者虐待は身近な問題であると感じますか	-0.406	**

n=44
Spearman相関係数
** p<0.01

IV. 考 察

1. A町のソーシャル・キャピタルについて

ソーシャル・キャピタルについては全体的に肯定的回答が多くを占め、ソーシャル・キャピタル指標6項目のうち4項目については8割以上の回答者が「思う」と回答し、残る2項目についても7割以上、もしくは5割以上が「思う」と回答した。本研究ではA町の民生委員のうち95.7%より回答を得ており、また、回答者は自分の居住地域周辺を民生委員の担当地域としていることから、町全体の傾向としてA町はソーシャル・キャピタルが高いことが推察された。

山内は、同質的なグループ内の結束を固める「結束型ソーシャル・キャピタル」の形成に関わる地縁組織について、戦後日本のコミュニティにおいては、自治会・町内会などの地縁組織が重要な役割を果たしてきたが、大都市部を中心に加入率の低下など弱体化が進んでいると述べている¹¹⁾。本研究対象が住むA町は、昭和の中頃に複数の町と村が合併して誕生した町である。また、回答者の86.4%が新興住宅地ではなく昔ながらの地域に住んでおり、A町は地縁組織が比較的機能している町であると考えられた。

更に、先行研究についてみると、木村らは、東京都内私立A高等学校生徒の保護者1530人を対象とした調査(回答者892人)において本研究の設問とはほぼ同様の4項目によりソーシャル・キャピタルを把握している¹²⁾。木村らの研究と本研究の結果を比較すると、「挨拶」、「住み続け」、「地区安全」、「留守世話」の順に、「思う」(木村らの研究では

「あてはまる」と回答した人の割合は、本研究では、88.6%、84.1%、81.8%、52.3%であったのに対し、木村らの研究では76.6%、69.1%、56.6%、29.2%であり、4項目とも本研究の方が高かった。このことから、A町はソーシャル・キャピタルが高いことが伺われた。

次に、適用したソーシャル・キャピタル指標について「思わない」の回答に着目すると、「急病の時などすぐにかかれる医療機関があって安心できる地域である」においては、11.3%ではあるが6項目のなかで「思わない」と回答した人の割合が最も高かった。よって、A町においては「住民が安心して医療を受けられる」といった側面に課題がある可能性が推察された。医療の充実・整備には限界があり地理的状況等によっても医療に対する安心感は個人で異なると考えられる。そのため、日頃から住民がかかりつけ医をもち身近な主治医による医療の促進を図ることも重要である。また、特定健康診査、乳幼児健診等の受診促進や健康教育などを活用し予防的側面からの健康支援、更に、緊急通報システムの周知・利用促進等をより図るなど、保健福祉サービスの更なる強化によって医療を補うことも重要ではないかと考えられた。

2. 高齢者虐待に対する認識と課題、および、ソーシャル・キャピタルとの関連

「高齢者虐待は身近な問題であると感じるか」に対して、約3割の民生委員は「思う」と回答していた。先行研究において佐々木らは¹³⁾、「高齢者虐待防止法」施行前の平成17年に愛媛県の市町内で民生委員を対象とした調査を行い、その結果のなかで「民生委員は、介護保険を利用していない高齢者が受けている虐待や、短時間の関わりでは把握が難しい心理的虐待についても把握していた」と報告し、民生委員が高齢者虐待の発見者としての役割を果たす可能性を示唆している。

よって、民生委員を担う際は、高齢者虐待の発見や対応に関わる可能性があることを意識することが大切であると思われた。また、本調査の結果では、平成18年に施行された「高齢者虐待防止法」の存在を知らない人が約16%であったことから、行政においては、高齢者虐待に関する知識提供の

機会を増やすことも重要であり、それらのことが、高齢者虐待の早期発見や早期対応、適切な対応につながるのではないかと考えられた。

一方、高齢者虐待に対する認識とソーシャル・キャピタルとの関連を検討した結果、両者の間に有意な相関関係が認められた。つまり、民生委員が、自分の住む地域では「高齢者虐待は身近な問題である」と認識しているほど、ソーシャル・キャピタルが低いことが示された。このことから、ソーシャル・キャピタルを高めることが高齢者虐待予防の一助となる可能性が示唆された。

V. 本研究の限界

本研究を実施した地域が一つの町に限定されていること、対象の同意に基づく質問紙調査であるため全対象のデータではない。また、ソーシャル・キャピタルを集団レベルの属性と捉えた場合、本研究の対象や分析方法に不十分な点がある。今後は、調査地域と対象数の拡大をはかり、集団レベルでの分析を行うなど信頼性のより高い結果を得る必要があると考える。

VI. 謝 辞

アンケートにご協力いただき、貴重なご回答をお寄せくださいましたA町の民生委員の皆さまへ心より御礼申し上げます。また、本調査を実施するにあたりご多忙のなか、ご協力とご配慮を賜りました社会福祉法人A町社会福祉協議会ならびにA町保健福祉課の職員の皆さまへ深謝申し上げます。

文 献

- 1) Ichiro Kawachi: 近隣の社会環境が住民の健康へ及ぼす影響 ソーシャル・キャピタル研究を探る. 公衆衛生, 72 (7) 565-572, 2008
- 2) 内閣府国民生活局編: ソーシャル・キャピタル-豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて. 国立印刷局, 東京, 2003
- 3) 近藤克則編: 検証「健康格差社会」介護予防に向けた社会疫学的大規模調査. 医学書院, 東京, 2007
- 4) Putnam RD著, 柴内康文訳: 孤独なボウリング-米国コミュニティの崩壊と再生. 柏書房,

東京, 2006

- 5) 藤澤由和, 濱野 強, Eum Woo Nam他: ソーシャル・キャピタルと健康の関連性に関する予備的研究. 新潟医療福祉学会誌, 4 (2) 82-89, 2005
- 6) 藤澤由和, 濱野 強, 小藪明生: 地区単位のソーシャル・キャピタルが主観的健康感に及ぼす影響. 厚生指標, 54 (2), 2007
- 7) 市田行信, 古川郷主, 松田亮三他: ソーシャル・キャピタルと健康. 公衆衛生, 69 (11) 914-919, 2005
- 8) 本橋 豊, 金子善博, 山路真佐子: ソーシャル・キャピタルと自殺予防. 秋田県公衆衛生学雑誌, 3 (1) 21-31, 2005
- 9) 本橋 豊, 金子善博, 藤田孝司: 高齢者のこころの健康と地域づくり. 老年精神医学雑誌, 20(5) 509-514, 2009
- 10) 浦野慶子: ソーシャル・キャピタルをめぐる保健医療社会学の研究展開. 保健医療社会学論集, 17 (1) 1-12, 2006
- 11) 山内直人: コミュニティ活性化とソーシャル・キャピタル. 公衆衛生, 70 (1) 6-9, 2006
- 12) 木村美也子, 山崎喜比古, 佐藤みほ他: 高校生の子をもつ中年期女性のメンタルヘルスと地域との関わり及び地域のソーシャル・キャピタルとの関連性の検討. 社会医学研究, 27 (1) 35-44, 2009
- 13) 佐佐木智絵, 赤松公子, 陶山啓子: 民生委員からみた家庭内での高齢者虐待の現状. 日本公衆衛生雑誌, 55 (9) 640-646, 2008